

奥日光寮

日光国立公園に属する栃木県日光市奥日光千手ヶ原に、「中央大学奥日光寮」が建設されたのは、一九六五（昭和四十）年のことであった。学生や教職員に「奥日光寮」として親しまれたこの施設は、本学ほか五大学が協力して建てた共同保養施設である「奥日光大学村」の一面を占める建物であった。

奥日光に大学村を設置する計画は、「学校法人懇親会」に加盟する本学、日本大学、明治大学、早稲田大学、法政大学、日本歯科大学、日本医科大学、和洋女子大学の会合で「東京の学生には人格陶冶に必要な恵まれた自然環境が少なすぎる」という話が出たことをきっかけとして、東京近郊の国立公園である奥日光千手ヶ原の国有林の一部を借用して共同保養施設を造るという構想が具体化されたものである。

六二年、大学別に扇状に区分して使用する建設地約六万五百ヘクタールと全大学の共有施設として講堂、食



中央大学奥日光寮

この間『中央大学新聞』は「奥日光大学村の課題」という記事を載せ、学生数人に奥日光大学村の存在を知っているか質問し、大部分の学生が知らないと回答したことについて、学校と学生の連絡不徹底は相互不信を生じさせることを指摘し、学生間の人間的交流の場とすると、教授と学生間の交流の場とすることを提言している。

利用方法については、竣工後から学生部、保健体育科、学友会など関係者が集まって話し合いがもたれたが、十二月の学生会館管理問題の全学封鎖などの影響で、決定を見るに至らず、六六年七月ようやく一一条からなる「中央大

堂、ホール管理室を建て、野外にはスタンドを設けて、外ホールを造る予定地千五百ヘクタールの二カ所が決まった。同年九月二十三、四の両日には、各大学の理事者による視察が行われ、除草・地ならしが始められた。

六四年四月に明大・早大が計画から撤退し、六校による大学村となった。五月には共同施設となる食堂・売店の建設が本決まりとなり、九月には木造二階建ての大学センターが完成、「財団法人奥日光大学村」が設立された。

本学の施設については、六五年の五月七日に飯田甲子郎・坂上捨松両常任理事が現地入りして地鎮祭が行われ、本格的に着工した。七月には、木造の部分の骨組みを終了し、ホールとなる鉄筋部分の基礎工事に入り、十月二十八日に竣工式が挙行された。敷地六、五〇二平方メートル、建物延べ八四八平方メートルの木造二階（一部鉄筋）、収容人員は一二〇人であった。

学奥日光寮使用規定」が施行された。使用期間は四月十五日から十一月十日までで、交通は日光駅からバスで中禅寺まで行き、七、八月の間は中禅寺湖から一日一五回の定時運航船で千手ヶ浜に渡り、そこから徒歩二キロの距離であった。

奥日光寮は、中禅寺湖、男体山に近く、キャンプ場も散在し、日光東照宮、華嚴の滝、戦場ヶ原などハイキングにも適した豊かな自然環境・文化環境を有し、数多くの学生・教職員に利用された。八四年七月には学生課主催の「留学生と楽しむミニトリップ」というセミナーも開催されている。

しかし、財団法人奥日光大学村の維持費の高騰と脱会を希望する大学が出てきたことから、八五年三月三十一日をもって財団法人が解散された。本学でも、学生厚生施設のある方について検討した結果、廃寮にするのが適当であるという結論に達した。ただ、廃寮にあたっては原状に復することが条件となっていたため、相当多額の費用を要することから埼玉県草加市に教育施設として無償寄付され、現在は同市「奥日光自然の家」となっている。